



現地に飛び込んで得た自信と チャレンジ精神

食物栄養学科 准教授 高橋 博

「あれ?どうしてスーツケースが道に並んでるの?」

ブリスベン空港からグリフィス大学へ向かうバスの中で、狐につままれたような気持で我々は目の前の光景を眺めていました。実は、走行中にトレーラーの扉が開き、載せていた全員のスーツケースがまるでドミノのコマを並べたかのように道路に点々と落ちていたのです。幸い紛失物はなかったものの、先行きに一抹の不安を覚えるスタートでした。

しかし案ずることなかれ。大学に到着した途端、そんな不安は見事に吹き飛びました。グリフィス側の担当者であるアイリーンさんが元気に手を振り、ホストファミリーの皆さんが学生たちを包み込むような優しい笑顔で迎えてくれたのでした。

こうして始まった2016年度人間生活学部海外研修。日程は2月25日から3月7日の11日間。学部プログラムとしてオーストラリアで実施するのは初の試みであり、協定校であるグリフィス大学(GU)のネイサン(ブリスベン)、ゴールドコーストの2キャンパスでの講義・ワークショップ、藤の学生向け特別英語クラス、3学科の専門に関わる施設訪問(総合家族サポート施設、保育施設、特別支援学校)や実習、さらに文化交流や観光(ゴールドコーストでのホテル泊を含む)などがギュッと詰まった意欲的な研修内容です。

さて、日曜の早朝に現地に到着してすぐホームステイ先へ引き取られていった学生たち。ほとんど全員が海外初体験で、11月から計7回ほど実施した事前学習・オリエンテーションでも、期待と不安の入り混じった表情を見せていた15名。一人ひとり見送りながら、一緒に引率して下さった保育学科の今野先生と、「ホストファミリーとはうまくやれるだろうか」、「バスには間違えずに乗れるだろうか」、「明日からの英語クラスは日本語なしで大丈夫だろうか」等々、まるで親になったような気分で心配していたのですが…。

それが杞憂だと分かったのは、初日のウェルカム・オリ



フェアウェルパーティーにて修了証を手にして記念撮影

エンターションを終えて、英語のSue先生の問いかけに澁淵と応えながら、積極的にアクティビティに参加する学生たちを見た時でした。その後も真夏のような暑さにもめげず彼女たちは快進撃を続け、研修が半ばを過ぎるころには、本当に生き生きとした表情で新しい環境に柔軟に溶け込んでゆく姿を見て、人間というのは短期間でこんなにも成長するものなのか、と一種の感動すら覚えたのを記憶しています。

オーストラリアの保育事情や栄養士の役割についての専門の講義と病院見学には通訳が付きましたが、GU在生との交流会、アボリジニー文化についての体験型ワークショップ、GU食栄プログラム生との調理実習、日本文化に関するプレゼン、そして、もちろん毎日のホストファミリーとのやり取りも、英語だけで全てやり通しました。教員のサポートも一部ありましたが、自分たちの潜在能力を存分に開花させ一回り遅くなった彼女たちは、この11日間で忍耐力、探究力、コミュニケーション能力、問題解決能力、他者との共感力、異文化順応力、そして何より自信とチャレンジ精神を手に入れたように思います。

「英語をもっと勉強して必ずまたここに戻ってくる!」参加学生の一人が最後に言った言葉が、研修の意義を象徴していました。研修とはその場限りのものではなく、その先に続く人生を変えるためにあるのだと。そして、研修を企画する我々教員にとっても、一緒に学び成長する貴重な機会なのだ。そんなことを強く感じた旅でした。

グリフィス大学在校生たちとの交流
(アフタヌーンティー)



アボリジニーの伝統的
ポディ・ペインティングの実演



食物栄養プログラムの学生たちと
オーストラリア料理の調理実習

